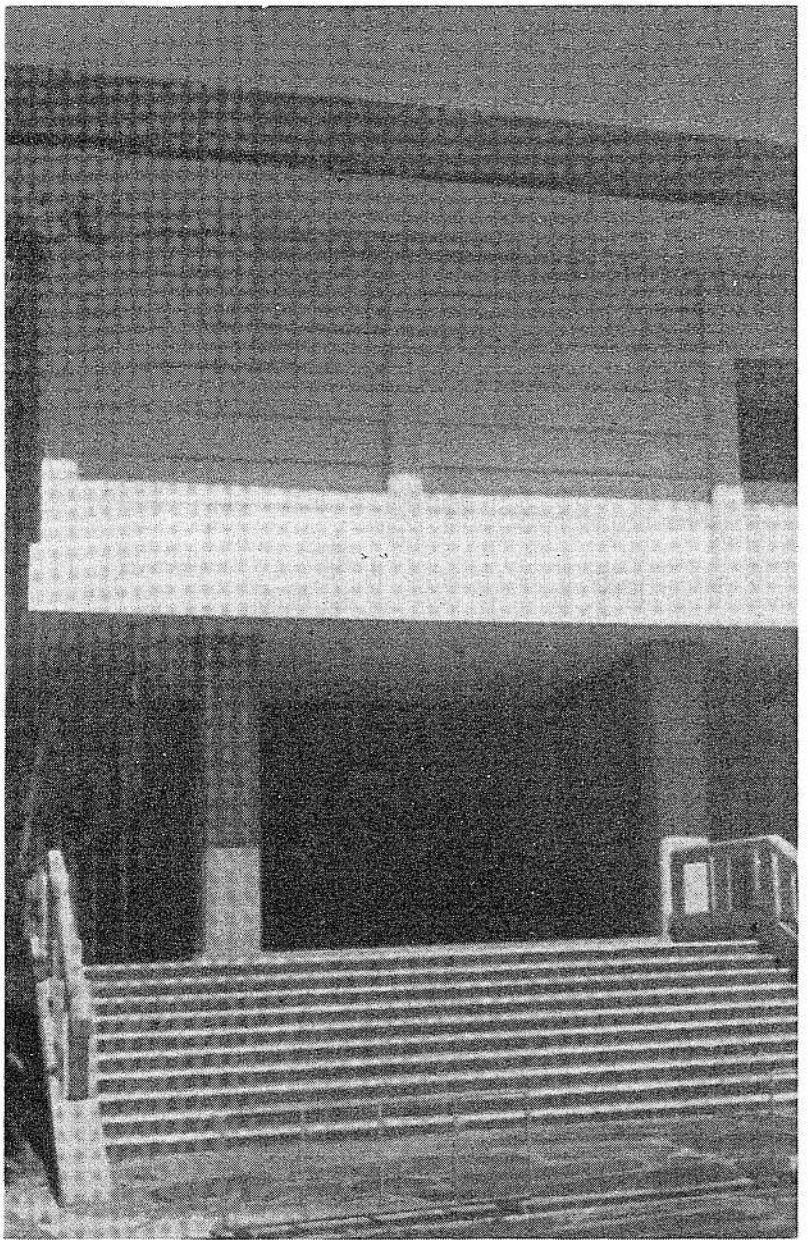


対馬資料館報

第2号

編集・発行
長崎県立対馬歴史民俗資料館
対馬厳原町今屋敷
電(09205)－2－3687

印刷所
長崎市栄町6－23
昭和堂印刷
電話(0958)21－1234

54年度「前期展」案内

今回、考古資料を主体として、館内陳列の模様替をいたしました。縄文早・前期の越高遺跡、中期のヌカシ遺跡、後期の志多留貝塚の代表的出土品と、弥生後期の古里塔ノ首石棺の出土品を一括して陳列し、それに浅海沿岸の古墳より出土した土器などを並べています。

その他各種の鏡、清玄寺梵鐘、対州焼の陶磁、民俗資料各種、宗家文庫の一部を例示して、観覧に供していますので、対馬の文化史に関心をもたれる人々に見ていただきたいものです。また児童、生徒たちの学習の参考にもなるものと信じています。

期間　自昭和五十四年五月中旬
　　至　〃　十月初旬
入場無料

対馬歴史民俗資料館

古鐘頌

白井　傳

わが対馬之国なる古城趾清水山下の高台に、昨師走上浣、白亜の県立対馬歴史民俗資料館開館しけり。江戸藩政期に於ける十数万点に及ぶ対馬藩宗家古文書その他等の収蔵は、遂次調査整理の上収蔵予定にして、現在は「毎日記」三三八六冊その他二万四千点余を収めているが、去る皐月上浣の頃、遠き世ゆこの島の中つ郷は、仁位郡清玄禅寺に伝われる古鐘をこの館の収蔵第一として展示室に収めたり。

その鉅鐘の銘に曰く、

「今上皇帝聖寿萬安
　国主惟宗朝臣貞国
本寺檀越惟宗朝臣信濃守盛家
　併子息職家
　女詩祚庭祐啓
筑前洲葦屋金屋大工大江貞家
　小工十五人
応仁参年己丑十月二十二日
　住持比丘雲梯妙騰謹誌旃
大日本国対馬洲仁位郡溪岳山
清玄禅寺住職雲梯和尚
欲鋳鉅鐘以啓発濁世之昏瞶」

刻まれし古き銘文を読み出でつつ、かの百年にもわたりし応仁の乱世時に鋳造させられし鉅鐘の銘の冒頭に、斯くは「今上の聖寿萬安」を祈念し、その末尾には「濁世の昏瞶を啓発せむ」とする悲願が、今のうつつに新たによみがえり胸奥に銘するなり。猶この刻銘と共に古鐘には下方に龍の昇りゆく、上方には天女の舞いゆく姿の描きありたり。

依りて正に思いを述べて作れる歌拾余首、茲に留誌して遠つ世の祖道を偲ばむ乎。

くにつかさ惟宗朝臣貞国がみかどまもりの銘のしるきはや

みだれよのときにしもなほおほきみをよろづよやすけくいのるゆゆしも

応仁のかの流亡のときにさへにっぽんのいのちなほものこれる

げんかいのはたてのしまのひなのへにすめらみかどをいのるたみはも

にごるよのたみのいのちをすくはむとこのおほがねをいにけるおもはむ

みづまきてたつのぼるみゆおほがねのいんいんとなりけむあさのしじまを

もをひきてゆたかにゑまふあまつめのそらにまひゆくがくのねかなしも

くだちゆくよのなげきいはずもだをりてかねつきにけむ雲梯和尚はや

てをふれば青銅のはだのひえびえと応仁のよのいのりしぬばゆ

いつももとせとほつみおやがのこしけるふるおほがねのいのちおもはむ

おほやまとこのわだなかにもりにけるひとつをごころつがざらめやも

くだちゆくよにしあれどもけふのひをここにいのればほととぎすなく

しいのはなきにさくあはれあさぢねのおほやまつかみおろがみまつる

●絢爛たる時代

津江篤郎

徳川十三代将軍源家齊公御代宗対馬守義質君茶道佐伯久和於東武在勤中辱蒙　思命川上渭白入門茶道稽古悉受皆傳帰于対州茶道滝川有仙傳授

千家表流茶湯之事

真台子

一真茶点法之事

真台子

一乱飾茶点法之事

真台子

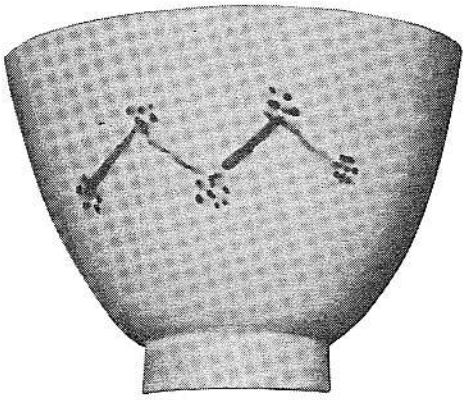
一長盆茶点法之事

右当流之奥儀ニテ従先師伝来口傳至極雖為秘事依御執心口傳書迄今相伝畢可秘他見他聞事

明治廿二年　旧三月

義質公時代（一八一二年襲封）佐伯久和は江戸にて川上渭白に表千家流を学び、帰りて銭屋高島忠右衛門（厳原町天道茂銭屋橋）から孫娘に渡された茶道免許状一巻がある。

千家表流茶湯巻



これを対州滝川有仙に伝授したのである。この系統を高島忠右衛門が受けついでいる。しかも免許状を家元に代って授ける役目まで許されていたことも今とは随分異っている。

桟原お屋形の図面をみると、茶道方詰所、水屋、御台子等のお茶に関する部屋割が描かれていて、茶道方の活躍と偲ぶことが出来る。又、茶道方御道具帳には、茂三、弥平太、道二等の茶碗や水指、香炉等は勿論のこと、対馬に関係深い絵高麗、朝鮮暦手、南京染付等の外に備前、伊賀、瀬戸等国内の名陶道具類も多く記されている。別棟倉庫には倭館で焼かれた陶磁類が、幕府からの送附命令を待つが如く収蔵されていたのであるが、御道具帳にあるものは、全然これらのものとは別のものである。

御道具類は御屋形の中で毎日使用され鑑賞されて生きていた。まさに当時は美術工芸群の絢爛たる時代であったと思うのである。

お道具帳の中には

一、古手御茶杓一本

義成様（一六一五年襲封）御持被遊候由

一、竹の御花入　一

天龍院様（義真、一六五七年襲封）御好ニテ掛花入ニ被仰付等の記入がみえる。倭館における茶会の記録や、御道具帳からみて、対馬茶道は中央との直接の結び付きにより相当古くから行なわれていたのであろう。たまたま義質公時代に前に述べた表千家流が新しく江戸からはいって来たのである。佐伯久和から代々宗家御用永勤となり、お屋形を中心として城下に新風が巻き起った感じである。

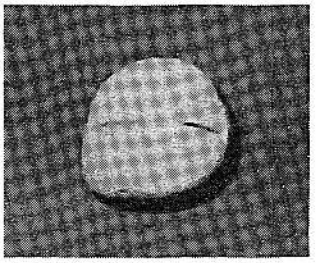
当時、各藩の茶道は盛んに行なわれ、例えば唐津藩の宗偏流、平戸藩の鎮信流等と新しく武家の茶道が樹立され、今日もなおその継承を重んじているところもある。

戦後、裏千家流が対馬を覆い、淡交会対馬支所を設置して活発な活動下にあることは同慶の至りである。島の伝統と、中央との繋りをもちながら、対馬茶道は益々発展し、受継がれて行くことであろう。

対馬の縄文文化と本館収蔵資料

永留久恵

縄文文化というのは、日本列島固有の先史文化として、北は北海道から南は沖縄まで発見されているが、西は対馬、五島まで展開している。さらに朝鮮半島の南辺釜山絶影島（対馬では「牧の島」という）の東三洞遺跡から、対馬と同じ縄文土器が出土している。同時に対馬の縄文遺跡からも、朝鮮系櫛目土器が出た例があり、有史以前から半島と列島の交流があったことを表わしている。対馬の縄文文化は、現在のところ早期の押型文土器から、晩期の夜臼式土器を出すものまで分布し、それは西北九州と密接な関係を示している。これらのうち本館に収蔵した資料をもとにして、代表的な例をいくつか選んで概要を解説してみよう。



1　越高遺跡（上県町）出土品。

九州縄文土器の前期に編年される轟式土器と同系で、それより一時期古い形式の隆起文土器が主流で、発掘者坂田邦洋はこれに越高式土器という名称をあたえた。この越高式土器の一群は、韓国の東三洞遺跡より出る最古層の土器と同じで、この文化のルーツについては、説をなす人によって見解の相異がある。

越高式土器Ⅰ型は、平底の深鉢形が多く、胴部に粘土紐を貼り付けた「いわゆる隆起文土器」である。隆起帯の巾は一cm程で、指頭で押捺した紋様が並んでいる。同Ⅱ型は、平底の深鉢形で、胴部全面に細い粘土紐を斜線状に平行に貼付している。

同Ⅲ型は、尖底の深鉢形で、口縁部に沈線による格子目文を描いていることから、報告書にはこれを櫛文土器の祖型としている。同Ⅳ型は、無文の深鉢形で、底部は出土していないが、尖底と推定されている。同Ⅴ型は丸底に近い平底で、日本の縄文土器には見られない壺形土器である。

これら一連の越高式と呼ばれる土器群と共に、九州の前平式土器（早期末）が伴出していることから、この遺跡の年代は縄文早期の末頃と見られている。その後これに続く縄文前期の尾崎遺跡が調査され、前期の前葉から後葉におよぶ層序が明かにされている。

越高の石器としては、黒燿石と頁岩製の石鏃、石匙、削器、掻器、石錐、石槍、石斧、礫器、敲石、石錘、石核、剥片多数があり、なかでも対馬に産しない黒燿石は、伊万里（腰点）産六九点、壱岐産八点、佐世保産四点と分析されている。

2　ヌカシ遺跡（豊玉町）出土品。

縄文中期の阿高式土器が多く、また阿高に続く南福寺式（後期初頭）も見られる。器形は深鉢形の平底が通例で、底部に椎骨のスタンプがついたものもある。口縁部に粘土紐の隆起線をめぐらしたものや、太い凹線文を施したもの等がある。胎土に滑石を混入したものと、滑石を含まず雲母を混入したものがある。

これら日本系の土器と別に、韓国系の櫛文土器があり、尖底の深鉢形と壺形が見られ、平底の壺もある。文様はいわゆる櫛目文とはかぎらず、沈線文や刺突文があり、それは日本の縄文土器にかならずしも縄目の文様があることを意味しないのと同じである。

ヌカシの石器には、石鏃、削器、掻器、石錐、石槍、石斧、扁平打製石斧、石包丁様石器、石ノミ、礫器、石錘、敲石、凹石、すり石、砥石、石皿、剥片、等があるが、特筆すべきものは扁平打製石斧と、石庖丁様石器である。扁平打製石斧は、縄文晩期の遺物によく見られるもので、土掘具と考えられるが、それらと同系のものと思われる。

また石庖丁様石器は、扁平な頁岩を磨研して片刀に作ったもので、石庖丁の断片と見られるが、穿孔が欠除しているために、報告書ではこのような名称が使われている。韓国の東三洞遺跡では、このヌカシと同じ阿高式土器を含んだ文化層から、石庖丁が出土しているとのことで、あながち不当ではないと思う。

3　志多留貝塚出土品。

志多留貝塚は縄文後期の遺跡で、北九州の鐘ヶ崎式土器が出ることで早くから知られていたが、近年の再発掘で西平式、北久根山式、宮下式等が分類されている。志多留の縄文土器には精製土器と粗製土器の二通りがあり、精製品は少なく、粗製品が圧倒的に多い。

胎土に貝殻を混入したものが多く、表面は貝殻条痕文が普通で、なかには太い凹線もあるが、概して文様は粗い。器形は深鉢が多いが、なかには浅鉢形もある。粗製土器のなかには、日本の縄文土器の分類に合わないものがあり、韓国にも類例がないところから、対馬で製産した固有のものではないかと見られ、さらに九州系の土器にしても、粗製土器はこちらで作ったのではないかと思う。

志多留の石器には、石鏃、石鋸、削器、掻器、石斧、石庖丁、石ノミ、礫器、石核、砥石、凹石、すり石、敲石、石錘、抉入石器、剥片、等がある。

また骨角器として釣針、銛ヤス、骨製刺突具、骨製ヘラ、骨製剣、それに鮫の歯の装身具、貝釧等がある。